

## 第56回中学生作文コンクール

優秀賞

便りが無いのがいい便り

愛知県 南山中学校女子部 一学年

武田 佳子

ある日の夕方、いつも通り母が会社から帰ってきた。荷物も置かないまま手に持っていた封筒をビリビリと破り中身を確認する。中身を見た母はホッとした様子で紙をしまった。

「何見てるの？」

私が聞くと

「会社で受けた健康診断の結果。悪いところないって。」

と答えた。

「当たり前じゃん。ママ、見るからに元気そうだし。」

私が何の気もなしにそう言うとも母は真剣に

「そんなことないよ。ママだって四十過ぎだし疲れやすくなってるし、いつ病気になるか分からないんだから。」  
と返してきた。

私には実感がわかなかった。母はいつもパワフルに動き回り、家事に仕事、私と妹の学校行事をこなしてくれる。こんな母が病気になるなんて想像も出来ないが、私は毎年の行事について思い出していた。

毎年、お盆に母の実家に行くとき皆でお墓参りに行く。母方のひいおじいちゃんのお墓をきれいにし、お花と線香をあげる。ひいおじいちゃんは私が小学二年生の時に亡くなったのでよく覚えている。亡くなったのは悲しかったけれど、九十歳を過ぎていて仕方ないとも思えた。その近くにあるもう一つのお墓にも必ず寄ってお参りをする。私の知らない人のお墓だ。誰のお墓か母に聞いてみたことがある。母は親戚で四十一歳で亡くなった人だと教えてくれた。お嫁にきて近所に住むことになったこの人は兄しかいなかった母にとってお姉さんのような存在だったようだ。病気になるって小さな子供達を残して亡くなるのはどんなに残念だったかと母は言っていた。数年後、この方の旦那さんも亡くなったが、近くに住む親戚みんなでこの子達の面倒を見て今では二人とも立派な社会人になったそうだ。周りの人の手助けももちろんあったが、何よりも両親が残してくれた保険金があったから、二人とも無事大学まで卒業することが出来たそうだ。

母はこの身近な人の若いときの死を目の当たりにし、健康の大事さを、そして保険の大事さを改めて考えるようになったという。実際、親戚の人が亡くなっ

## 第56回中学生作文コンクール

た四十一歳を過ぎた頃から何があっても不思議ではない、と思っているそうだと。そのために生命保険にもいくつか入っている。万が一のときに保険金を受け取るためには月々の保険料を支払う必要があり、父も母も毎月安くはない保険料を支払っているという。使わないものにお金を払うなんてもったいない、と私は考えてしまう。しかし、保険は健康な時にしか入れないので、健康で気持ちに余裕がある時にこそ保険に入らなければいけないそうだと。入っていると安心な保険だが、使わないことがいいことなのだろう。我が家は保険を受けとったことがないが、これは大病やケガをしたことがないという証だ。「便りがないのがいい便り」という言葉を聞いたことがある。悪い便りがなければ元気でいるという意味だそうだと。保険も一緒だなと思った。「使わないのがいい便り」だ。保険を使わないことはみんな健康であるということである。今年もみんなでお墓参りに行くだろう。私は墓前で報告しよう。「今年もみんな元気です。」と。